

復興ムーブメント

～被災地復興と地域貢献をめざして～

創刊号 令和元年12月

久留米大学講義『被災地復興と地域貢献』発

被災当時と現在

平成29年7月 福岡県に九州地方で初めて「大雨特別警報」が発表された。

朝倉市は特に被害が大きく、テレビや新聞などで人工林が崩れて大木と濁流が街を飲み込んでいく様子を見た方も多くいらっしゃるだろう。

	死者	行方不明者	重傷者
朝倉市	33 名	2 名	11 名
東峰村	3 名	0 名	0 名
うきは市	1 名	0 名	0 名
日田市	3 名	0 名	0 名

* 1

上記、消防庁の報告より多くの尊い命が奪ったのが今回の災害であり、報道が少なくなっているとはいえ今でも街や住民の方々の中には傷がいえない方もいる。加えて公共の土木施設（河川、道路、橋梁）でも合計137億円の甚大な被害があった。

この被害の原因は「線状降水帯」にある。



「線状降水帯」とは次々と発生した積乱雲が列を成して巨大な線状の一つの組織体を形成

し、数時間にわたって同じ場所に通過または停滞することで強い降水を伴う雨域のことを総称する。平成24年九州北部豪雨も原因は同様であるが24時間降水量（解析雨量による）では前者が486ミリに対して朝倉市では約1000ミリを記録したことから被害の違いが如実にわかる。

災害から2年が過ぎた2019年の夏に仮設住宅の期限が迫り災害認定に関する見直しを求めるなど住民と行政との間では多くの問題が未だにあるのが現状だ。

しかしながら未来に向けて進み始めた人たちが多くいる。地域の魅力を再発見し多くの人に知ってもらう。被災した事実から多くのことを学び伝えることに加えてほかの地方に援助に行ける拠点を作る。復旧（ここでは元の状態に戻すことを指す。）は行政の手である程度可能であろう。しかし残された私たちはさらに発展し多くの人に被災地が元気を取り戻したことを伝える、災害時には助けに行くというようなプロジェクトを進める必要がある。復旧から復興へと活動を移行する。そこにボランティアという形で若者が新しい発想やアイデアを持ち寄って参加する活動が近隣の大学で行われている。

土砂をかき出すだけがボランティアではない。様々な視点から被災地にかかわり復興に学生自身何ができるかを考える。本紙では久留米大学に加え様々なアイデアで被災地に新たな風を吹かせるキーパーソンを紹介する。皆さんの被災地への認識をアップデートするとともにボランティア活動に参加するきっかけになれば幸いだ。＜林編集長＞（参考文献・西日本新聞社「九州北部豪雨大水害の記録」・福岡県朝倉市「平成29年7月九州北部豪雨」）画像元(C) 2019 MBC防災情報。



久留米大学の学生が行っている多様なボランティアを紹介！



HPグループ

ボランティア活動や被災地の情報をタイムリーに更新することができるので多くの人がHPを見るだけで詳しく情報を知ることができます！

HPはこちらからご覧になれます



合宿グループ

他大生と繋がりに一緒にボランティアの活動をすることでボランティアを楽しめる入り口になったらと考えています！只今春合宿の絶賛準備中です！



特産物グループ

朝倉の特産物の柿や梨などの魅力を伝えるべく、直接農家の方から手配し「久留米たまがる大道芸」という秋の祭りで販売しました！大盛況でした！



星野村観光グループ

過去に朝倉で3度開催した合宿でのノウハウを生かし今度は星野村で鹿などのジビエ料理に害獣駆除ボランティアをかねて多くの人に知ってもらう他星野村の魅力をたくさん知ってもらうツアーを計画中です！

< 林・森山・山下・喜多 >

杷木を中心に活動されている望月文さんにお話を伺いました

・ボランティア活動のきっかけは何ですか？

地元が災害に見舞われましたが、自分の住まいからは少し離れていました。立ち入り禁止になっているところも多く、自分からそこに関わる気持ちはなく過ごしていました。

そんな中で、たまたま知り合いのナン農家の方から、ナンを作ったものの大半が災害でダメになり、残りを売ろうにも販売できず、収入を得る手段がなくて困っていると聞きました。災害の被害を受けた場合、行政や社協は全体を支援するのが役割であるため、個人を直接助けることができません。しかも、支援はいつまでも継続できないのが現状だそうです。はじめてそのような苦境を知り言葉に詰まりました。ナンの販路なら何とかなるのではと考えて、話を聞いた後、ボランティア関係の人に相談をしました。そしたら、だったらここでと言われ、ボランティアのつながりの中で一気に販路が広がり、今までできなかったことができるようになりました。これが始まりです。その時には特にボランティアをしているつもりはありませんでした。話を聞いて、何か個人的にできないかという思いで行動しただけです。やがていろいろな活動がボランティアになると気づくようになりました。

・杷木ベースはどのようなものですか？

自分としては、現地で直接ボランティア活動をするというよりも、まず、活動の需要を掘り起こし、活動したい人の受付となり、その間を「つなぐ」という点で何かできないかと考えました。バラバラになった地域の高齢者が集まって懇談する「語らんね杷木」や、農地を使えなくなった方が自由に使える「共同農園」は、被災した人の心をつなぐ取り組みとして、とても喜ばれ、今でもつづいています。そのような活動をしながら、いつの間にか杷木復興支援ベースの形ができました。

最初は復旧が活動のメインでした。しかし、個人が生活再建するためには収入面が重要になります。行政は全体的な支援はできますが、個人の収入までは支援ができません。町自体の復興には被災者自身の収入が不可欠と気づきました。そこで特産品の開発や、農作業のお手伝いなど、個人レベルの支援を行って、住民自らが前に進む活動を、私たち自身が行う必要があると考えました。これは、実は町づくりそのものです。そこで、杷木復興支援ベースから、杷木ベースに名称を変えることとなりました。

ボランティアの良いところは気づけばすぐに行動にうつすことができることです。行政と違って、もし失敗してもリトライできます。肩の力を抜いて、さまざまな失敗から得た教訓を、行政や事業体に伝え、個人と事業をつなげて、点から面にする必要があります。そうして得た経験を集める場所にするのが、杷木ベースの新しい目的だと思っています。



望月文さん

・若い人に望むことはありますか？

私は、行動する中で多くの気づきがあり、いつの間にかボランティアの世界に触れ、40歳になって地域の中で生きていく方向が定まりました。今杷木町の一角に町づくりの小さな拠点づくりを計画しています。皆さんも、地域の中でできることはたくさんあります。いろいろな活動ができることを知り、広めてもらいたいと思います。

地域の現状を知り、自分が気づいたことを、自発的に伝えて広めるだけでも、ボランティア活動になります。未来を担う皆さんには、これからの世の中を変える大きな力と可能性があります。行動を通じて何かをやり遂げることの達成感を得てください。ボランティア活動では、お金にはかえられないとても貴重な経験ができます。是非一度、若い人たちに杷木ベースや拠点に来てもらい、その体験を受け継いでもらいたいと思っています。 <山下・森山>

12/7 「語らんね杷木」に参加してくれた久留米大学の学生に、参加した感想を聞いてみました

- Q:被災地の方の話で、何が印象に残りましたか？

 - ・元あったところに住みたくても住めない現状（法学部2年H君）
 - ・悲しんだり泣いたりせず、家が流された状態のことや当時のことを話す姿（法学部2年Wさん）
 - ・友人が流されて亡くなったという体験談（法学部2年S君）
- Q:自分が被災地に対してできることはなんですか？

 - ・被災地のことをよりよく知ること（法学部2年S君）
 - ・自発的に復興に取り組む。現状を少しでも知って、みんなに広げる（経済学部1年N・Mさん）
 - ・朝倉という町がどのようなものか知る。今回のような活動の場を探す（法学部2年K君）
- Q:どうやったら被災地に学生ボランティアが集まると思いますか？

 - ・学校で被災地やボランティアを学ぶ時間を作る（1年K君）
 - ・呼びかけ、授業の一環です（経済学部1年J君）
 - ・ボランティアのイメージは泥出しや片付けのイメージが強いので、今回のような人と話すことなど誰でも簡単にできることをアピールする（法学部2年Wさん）
 - ・SNSを活用した広報活動を行う（法学部2年S君）

<森山>



（上）かたらんね杷木の様子
 地域の方とコミュニケーションをとって、
 現地の生の声を聞いている



喜多祐斗くん

授業の中で、7年前に被災した星野村に行きました。町外から来られる人実際に星野村を見てもらい、感じてもらうことが大切で、多くの人から意見を聞けるのがとても貴重だと仰っていました。そのためにも今以上に多くの人を招き入れられるようにイベントやボランティアの募集をかけることも必要になってくると考えられます。私ももっと関わって手助けになれることがあるのならもう一度ボランティア等に参加して、活性化のために貢献していきたいです。



星野村での活動の様子



鐘ヶ江聖史くん

プレーパークに初めて行ってみて、子供たちと自然のなかで水鉄砲やブランコなどいっぱい体を動かして遊びました。子供たちは元気だなあ自分にもこんな時代があったなあと思いとても癒されました。子供たちの遊びの要求に応えていくのは嬉しかったし、子供たちの笑顔がとても可愛かったです。特に印象に残ったのは子供たちが木材をのこぎりで切っているのを見たことです。こういう工作も好きだと知って感心しました。この前テレビ番組で子供が大人と一緒に竹とんぼを飛ばしている姿を見て、プレーパークでもこういうのがあればもっと増えるのではないかなと思いました。子供たちの元気いっぱいの姿を見て安心できましたし、貴重な体験ができました。自分自身が何よりもとても楽しめました。



プレーパークでの様子

知らなかった！ボランティアの形

子供といっぱい遊ぶ、好奇心に応える朝倉の「プレーパーク」あなたのボランティアのイメージを変える新しいかわり方。久留米大学からも多数の学生が参加しています！

- ・子供が高いところに登ったり、危なそうなことをしたりしても「危ない！」と極力注意しない。
- ・子供自身の「やってみたいと思うこと」を表現していく遊び場で子供が生きる力をはぐくむことを支える。

など自由な遊び場を作ることを朝倉で行っている山下さん。



本取材では、はじめるきっかけや平成29年九州豪雨が起った直後にプレーパークを行った際の心境、大学生へのメッセージなど熱く語っていただきました。こちらのインタビューの内容はHPに載せています。ぜひご覧ください！<林>